

周辺からの記憶 21

2015 年 福島

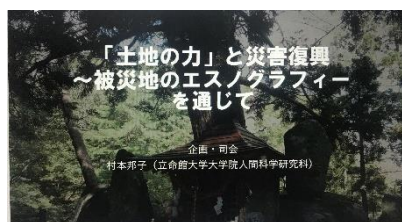
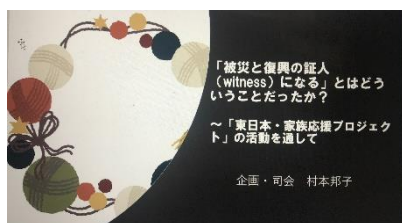
村本邦子（立命館大学）

今年はドクターの院生たちを受け持つことになったので、責任もって指導できるよう、試しに自分が学会発表などしてみることにした。研究発信すべきデータはたくさんあって、アウトプットがインプットに追いついていない状態。

対人援助学会誌への特集論文を書き上げ投稿した後、対人援助学会で、口頭発表「被災から防災へ、ローカリティからネットワークへ：婦人相談員のための『災害時相談対応ハンドブック』作成と研修の経験から」と『被災と復興の証人（witness）になる』とはどういうことだったか？：「東日本・家族応援プロジェクト」の活動を通して」のワークショップ企画。私自身は「『証人になること』と倫理」をテーマに話題提供した。

次に、日本質的心理学会第15回大会で、ポスター発表「災禍を生き抜く女たち：原発事故によって避難を強いられたAさんのライフストーリー」と、シンポジウム企画『土地の力』と災害復興～被災地のエスノグラフィーから」、私自身は「山元町復興における民話・伝承の力」の話題提供。

やってみての感想は、ありふれているが、研究としてまとめる作業がすごく勉強になること、新たな出会いが生まれ、今後の展開が見込まれること。しかし、もっと多くの人々に向けて発信すべきだな。もうしばらく、さまざまな切り口で研究情報発信してみても、ある程度感触がつかめたら、助言中心に、院生たちに頑張ってもらおうとしよう。



2015年12月5日（金）

<ビーンズふくしま>

5年目の福島。こむこむで会場準備と打ち合わせをした後、NPO 法人ビーンズふくしまの事務所へ行き、ビーンズ福島の概要を聞いた。1998年、不登校の問題から始めて、ひきこもり、若者の居場所づくりや就労支援、親の相談支援、震災支援だけでなく、貧困問題、つまり、家族変化のなかで弱くなったところを地域で支えるという貧困対策にも取り組み始めている。現在は、市内に5ヶ所事務所があり、子どもや家族に寄り添いながら、震災だけでなくいろいろな事業を展開しているとのこと。そのなかでも、「みんなの家福島」は、今年3月19日にオープンした多世代のコミュニティハウスということで、そちらに移動して、さらにお話を伺った。

道すがら、あちこちに大きなパチンコ店ができているのに驚く。レジャー白書では、近年、パチンコ店が年々減少しているとされているが、福島では急激に増えているという。仮の避難生活で見通しも立たず、農業や漁業をやっていた人々など、やることがなければ、狭い仮設住宅から出かける場所としてパチンコ店ができれば、そこに行くというのもわかる気がする。何かもっと良い事業はないものか。



<みんなの家へ>

「みんなの家」は、福島市の中心からは少し離れたところにある。団地ができて50年経って高齢化した地域の一軒家を借りている。町内会長の理解もあり、ハロウィーンには、近所にお菓子を配り、若者やご

近所のおじいちゃんおばあちゃん、町内会にも協力してもらって地域交流が進んだそう。

もともと、ビーンズ福島では、「ママカフェ」といって、月1回、自主避難の母子の居場所をやっていた。そのなかから、「毎日集える居場所があったらいいね」「福島で頑張ってたママ、震災後に赤ちゃん産んだママ、地域のおじいちゃん、おばあちゃんも一緒に集えたらいいね」と声があがり、2015年3月に「みんなの家」がオープンした。

平日の10時から16時まで毎日開館し、スタッフが常に3~4人いるようにしている。年間登録料500円で、いつでも自由に来ていいということで解放している。小さい子どもを持つママが中心だが、子どもが小学校に行っている間、ママだけが来るとか、ビーンズで若者支援している若者たち、ご近所のおじいちゃん、おばあちゃん、常にいろんな世代が自由に集える。お昼ご飯も持ち込んで食べられるということで、重宝されている。幼稚園の帰りに寄って、2時から4時まで遊ばせるというママもいる。ポカポカフレンズという12名のボランティアからなるサポーターたちが企画してくれるワークショップやイベントなどもあり、先ほど言ったハロウィーンその他、アロマグッズや消しゴムはんこなど作るようなワークショップもあるとのこと。

避難していたママが不安をしゃべっていくこともある。ママカフェは月1、保健センターでやっているが、ここでも毎月1回、「ママカフェ・ミニ」をやっている。「ママトーク」というのは、震災後の生活について話そうというもの。避難しなかったが



放射能のこと心配とか、震災後に赤ちゃんを産んで心配になった、どんなことに注意して暮らしたらいいのかなどなど、福島でも風化し始めている震災のことを話せる場を作ろうよということでやっている。

スタッフのなかにも自主避難されていた方々がいて、同じ体験を持つママと話せると安心するという。避難経験を持つママたちの声、スタッフのみなさんの個人的体験も聞かせて頂き、本当にそれぞれがさまざまな状況を抱え、悩みながらここにいたことが具体的によく理解できた。

たとえば、特に小さな子どもがいる場合、避難するかしないか。若い夫婦は思い切って転職して県外に出ていくこともあるが、一時的な避難だとすると、父が仕事をやめてまで行くのはというのがあって、ほとんどの場合、母子避難となる。母が避難するとなると、いろんなつながりを断ち切って行かなければならない。母が役員やボランティアなどやっていたことを、「ごめんね」と他の人にお願いして出て行かなければならないことも辛かった。住むところが変わるというだけでない。

また、避難先で子どもが辛い思いをしていると、親として悩む。福島市は避難を受け入れているところでもあるから、本当のところ福島から避難をするのがいいことなのか、悪いことなのか悩む。それから、今度はいつ戻るかという問題もある。幼稚園や学校に合わせて、年度末や年度初めに動くことが多く、入学や受験などのタイミングも考える。思春期になると子どもも友達関係が重要になり、帰るのを嫌がることもあるが、結局のところ、子どもは親の決定に従うしかない。

一人一人の震災。介護する親や犬がいて無理だと残った人もいる。大丈夫と思った人、残らざるを得ない人、気持ちの温度差もあった。家族一緒に暮らすことと健康を天秤にかけ、すべては自分の責任で選ばな



ければならない。

今の日常生活では、放射線や原発のことを話題にすることが難しい。ふつうのママの会話はできて、食品の線量は話題に上らない。震災後初期は、そのことが常に話題のトップだった。避難した人は、その話題が減っていった過程を知らない。心配がピーク状態で避難したので、その気持ちのまま戻ってくることになり、ハードルが高い。福島に残った人たちにとっては、少しずつ不安が減っていったプロセスがあったかもしれないが、それを知らないため、そんなワンクッションとしてママカフェは大事だった。

原発のことを話題にするのは難しく、話題にしたくない。まったく心配していない人もいるし、本当は心配だけど、誰と話していいのかわからない。不安に温度差があるから、心配を打ち明けていいのかどうかなど、とても気を遣う話題。最近でも、まつぼっくりを使う時、「福島のはまだ放射線量が高い」と心配するママもいれば、「大丈夫でしょ」というママもいて、「まだ言ってるの?」と言われると、何も言えなくなる。「この人なら大丈夫かな」など、相手の様子をうかがいながら気を遣う。震災になってから結婚話が破談になってしまった人もあるし、夫婦間で放射線の考え方が違ってきて離婚した人もある。考え方、感じ方はさまざまだから難しい。

ある人の声を紹介してくださった。「国や東電への思いはそれぞれ。土を汚され、風を汚され、水を汚され、誰のせいなのか考えればきりが無いが、後からわかった情報の隠蔽に、本当にここに住んでいて大丈夫なのだろうかという気持ちを持つ人も

いる。窮屈な暮らしになり、外遊びできなかった時間は取り戻せない。震災自体はどうしようもないが、こんなふういったん爆発したら收拾できないものをどんどん建てていた国だったんだな、それを知らない自分たちも自分たちだし、安全だと言ってきた国も国だなと。それで再稼働とは。裏に除染土が置いてあるのが悲しい。いまだに庭に埋められていたり、後にコンクリートで固められていたり。今ではその風景が当たり前になってしまったけど、本来は違う。家を奪われ、そのままあるのに帰れない人たち、酪農家で殺処分、苦しんだ人たちがいることを忘れているのか、見ないふりしているのか。子どもが小さい頃は農業を気にして、美しい自然のなかで、小さい庭に家庭菜園をし、ピンセットで虫をとったりしていたのに、今ではもう作る気力も出ない。農家さんたちはすごい努力を重ねて対策を練り、測定もして頑張っているけど、個人ではそこまでできないから怖いと思ってしまう」と。こんな当たり前の声をもっともっと多くの人たちに聞いてもらわなければならないと思う。

<仮設住宅学習支援>

夜は、ビーンズふくしまがやっている仮設住宅2ヶ所の学習支援に参加させてもらった。

仮設住宅に暮らす子どもたちは、故郷を離れ、5回も6回も転校し、友達とも離れ離れ、バラバラに仮設住宅に入って周囲は知らない人ばかりという状況にあった。それまで海沿いに三世代で暮らしていたよ

うなスペースから、4 畳半 2 間のプレハブで家族もバラバラ、子どもが泣いたり暴れたりしたら丸聞こえのため、我慢しなければならないことが多く、ストレスがたまる。家以外に子どもたちがいれる場所はないのかと考えて始めたもの。仮設住宅での居場所づくり、学習支援から始めた。2011 年の 9 月スタート。

昨年が一番大きい仮設の学習支援に参加させてもらったが、今回は別の二か所に参加した。子どもたちも部活や塾やで忙しくなり参加者は減ってきているというが、逆に言えば、今も利用している子どもたちは、いろいろと困難を抱えているのだろう。個別の背景はわからないが、おうちの方も大変なんだろうと思う。一緒に遊んだり、宿題をしたりする。学習状況はなかなか厳しいが、スタッフとの関係ができており、甘えたり、ふざけたりしながら少しずつ学習に取り組んでいた。こんな場所があって本当によかったと思う。



2015 年 12 月 6 日 (土)

<極久里珈琲>

今年も、仮店舗から新しく福島本店をオープンした極久里珈琲を訪れた。タクシーを降りると、素晴らしい虹。自慢の焙煎機やお菓子工房を見せてもらい、おいしいお菓子と珈琲を頂きながら、M さんのお話をお聞きした。

とにかく、どんな状況にあっても食べていく、暮らしていくために、仕事はしないではいけない。年寄を抱えて避難しているし、守るものがたくさんあるから、だらけていけない。お客さんに支えられて今がある。珈琲を愛し、うちのケーキをおいしいと思って食べてくださる方が来てくれたらいいなど。最初の頃は、カフェで原発の勉強会をやったり、カウンターで原子力は必要かなんてガンガン議論したりしていたが、今は、地域に愛される普通のカフェとしてやりたいと思っている。だから、住宅地にひっそりと溶けこむように建てた。

避難先に溶け込んで、住民と一緒に地域活動するとか、たとえばごみ拾った落ち葉拾いなどしようと、もちろん住民票は飯館にあるけれど、避難先の班に入り、今年は班長をやらせてもらっている。ごみだって下水だってお世話になっているし、いざ誰か亡くなればお葬式だってここでやらなくてはいけない。いつまでも故郷にばかり思いを寄せるのでなく、この福島市にも貢献しなければならないと思う。やはり、こちらからドアをひとつあけて関わってい

かないと、地元の人も嫌になるよね。

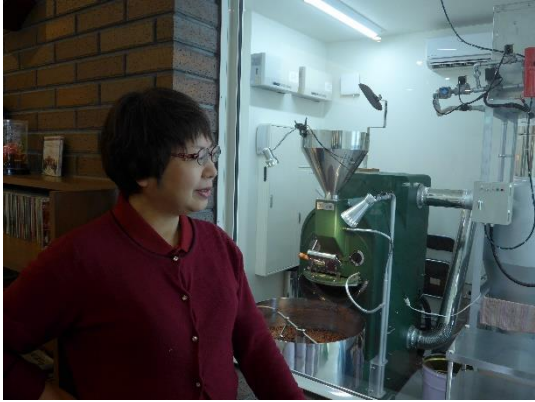
「お店もやりながら地域のこともやって、大変でしょう」と言うと、前より楽なのだ。飯館では、もっともっといろいろな組織があって、今日も集まり、明日も集まりという感じで、町は楽。偉い先生たちはコミュニティの崩壊などと言うけれど、そんなこと言われるのは癪。コミュニティが崩壊して、女たちはせいせいしている。今は人を選んでコミュニケーションを取る。大事な人たちとは、連絡を取り合って、今も会っている。

帰る帰ると言うのは男。福島に家建てた人たちも、「それは奥さんの家で、俺の家は飯館だ」などと言うのだそうだ。「子どもや孫たちのために里帰りするところもないと困ると、奥さんにねだられて建てたけれども、俺の家はここではない」と、そんな夫婦が多い。女はもともと嫁いで移動するが、男は跡取り意識が強いからだろうか、自分の所有しているものを奪われてなるものかという気持ちかなど、盛り上がる。

福島県民の行政不信、無責任な帰還政策への怒り、やるべきこととして東電への訴訟は最後まで闘う。納得がいかないのに、姿勢として誰かが訴訟を起こさなければと思う。勝てば勝ったでいいけど、負けても構わない。すべては勉強。自分は意識高くやってきたつもりだったけれど、国を疑わなかった。福島は災害も少なく、痛い目にもあっていなかったから、水俣とか沖縄とか理解できなかった。勉強不足だった。人間って馬鹿だな、自分が痛みを受けないと寄り添えない。そういう点では、被災して、どこを見て生きるかというのがはっきりわかった。

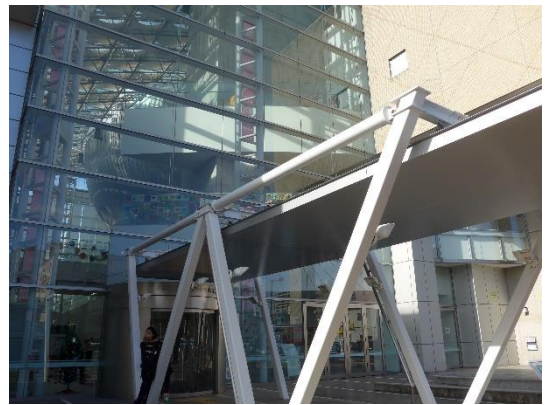
いつもパワフルで前向きな M さんに感動させられるが、「仕事してるときには全然、もう、そういうの忘れちゃうし、ふつうにやってるけど、夜になって、ごはん食べてる時に始まって、また眠れないとかなるんだけど」と笑いながら言われる言葉に、「そうだよなあ」と思う。すべてに対して到底納得のいくものではないし、今後の見通しも立たないのだから。





<こむこむでのプロジェクト>

福島市子どもの夢を育む施設こむこむにて、5年目を迎える「東日本・家族応援プロジェクト in 福島 2015」。今回は、漫画展会場として、1階のにぎわい通り（図書館横）と2階交流コーナーを使わせてもらったので、たくさんの方々の眼に触れることができた。恒例のクリスマスカレンダーづくりも、1階のにぎわい広場で開催したので、こむこむを訪れていた家族でいっぱいになった。





今年は、新しい企画として、「ふくしま民話茶屋の会」「わらべうたの会はないちもんめ」の協力を得て、福島に古くから伝わる民話や伝承遊びをご紹介頂き、楽しい時間を過ごした。東京おもちゃ美術館から寄付頂いたおもちゃセットを活用した遊びコーナーも大人気で、終始たくさんの子どもたちでにぎわっていた。





＜藍原寛子さんのお話＞

プロジェクト終了後、福島のジャーナリスト藍原寛子さんを訪ねて、お話を聞いた。

放射能や原発のことは、ますます話題にあげにくくなっている。震災直後は、誰が見ても放射線の影響があるという段階で、自由に物が言えた。「これは大変」、「放射能嫌だ」、「原発反対」とみんな言っていたのに、放射線量が下がる、行政のもう大丈夫という大きな話のもとで何も言えなくなっている。

今の福島は、避難するか、地域に留まるか、個々の家族の選択に委ねられ、その責任を家族が担っている。子どもの転校、高齢者との同居、仕事の形態、様々な事情が家族によって異なる。放射能汚染の捉え方もさまざまで、親しい人間関係が考え方の違いで気まづくなったりする。県外に避難した人、避難指示区域から福島市に避難してきた人、自主避難した人、避難して戻ってきた人、ずっと留まって生活している人、浜通り、中通り、会津という大きな地理的区分においても被災状況と思いは違う。心の奥に不安や疑問を抱きながらも、そのこ

とを議論する場がない。

双葉は、いわきでコミュニティ会議をやったりしていたが、県外避難した埼玉を拠点にして、県外避難と県内避難を分けてしまったので、埼玉まで避難できなかった県内の人は県外の様子がわからず、県外は食事も無料だったり、物資はたくさんあったりと支援状況の格差が後でわかって不満が出るなど分断されて、双葉は街に元気がない。元気なのは浪江かもしれない。雄高浪江原発を退け、原発がないので、もともと、味噌や焼きそばのBQグルメなど、自力で頑張っていた。

東電社員が民家の掃除をしたりしているが、家をきれいにするというのは、戻ることを支持する。みんな口では戻りたいと言っても、実際に戻るかどうかは別の話。檜葉に帰った人が、自分のところしか電気がついていない怖さ、何かあったらどうなるのかと言っていた。人があるから町がある。人がいないと、そもそも自治体が成り立たない。中間貯蔵の受け入れも含め、今、それが議論できない。あちこちで震災遺構を残そうとしているが、何を残して何を残さないかは政治的なところがある。福島では、その会議自体が秘密になって、住民は議論ができず、言いたいことが言えない雰囲気。

行政は「オール福島」と言っているが、沖縄とはその後が全然違う。翁長知事は、「オール沖縄、イデオロギーでなくアイデンティティ」。福島は、浜通りとか中通りとか、バリエーションをまず認めてからオール福島と言うのでないと、イデオロギーに突っ走る。今はっきり物が言えるのは中通り。会津は風評で自分たちは福島と切りた

い、浜通りは東電にシンパシーを持っている。「たいへんだったね」、「お掃除来てもらってご苦労さま」とか。

5年で復興期間は終わり、次は創生と、国は日付で決めるしかないのかもしれないが、現実には、時には復興、時には創生、時には停滞。そうすると、予算や支援員の費用が減る。セイブザチルドレンも福島から東京に撤退、JANICも去年まで、どんどん減っていく。福島には、会津若松と田村に子ども食堂ができたが、避難して通っている子どもたちも、だんだん貧困問題として吸収されていく。

震災後、甲状腺がんと診断されたのが153名、115名が手術した。県民健康調査座長は、「放射線の影響は考えにくい」と言ったが、委員のなかには多発だという声も出ている。実際、周囲に白血病になる人が多いと感じている。この5年で4人も知り合いが白血病になり、4人が亡くなった。健康影響があると思うが、行政は認めない。大多数の人は何も言わない。自分の身には起きないと思っているが、心配で県民健康調査検討会を傍聴するメンバーもいるが固定されている。

お話を聞きながら、福島が年を重ねるにつれ、ますます難しくなっていることを感じる。12月3日、富岡と楢葉が指定廃棄物の受入れを了承したというニュースを聞いた。地元の新聞には、「受け入れやむなし」「住民の気持ち無視」という住民の声が紹介され、両町長は「苦渋の決断である」と言っている。5日の福島民友は、避難解除3ヶ月の楢葉の帰還者は人口の5%、その7割が60歳以上だと報じていた。議論できない、住民の声が政策に反映されない。国

はそれを狙っているのかとさえ勘繰りたくなるような実情だ。福島の人たちが声をあげられなければ、それ以外の人々には何も見えず聞こえない。分断に抵抗するために、つながって大きな声をあげていかなければならないはずだ。福島の問題は福島の人たちだけの問題ではない。そっくりそのまま私たちの問題なのだ。



つづく